

2 麦 類

(1) 要 旨

ア 作付面積

平成28年産4麦（小麦、二条大麦、六条大麦及びはだか麦）の子実用作付面積は27万5,900haで、前年産に比べ1,500ha（1%）増加した（表2-1、図2-1）。

イ 収穫量

平成28年産4麦の子実用収穫量は96万1,000tで、前年産に比べ22万t（19%）減少した（表2-1、図2-1）。

図2-1 4麦（子実用）の作付面積及び収穫量の推移（全国）

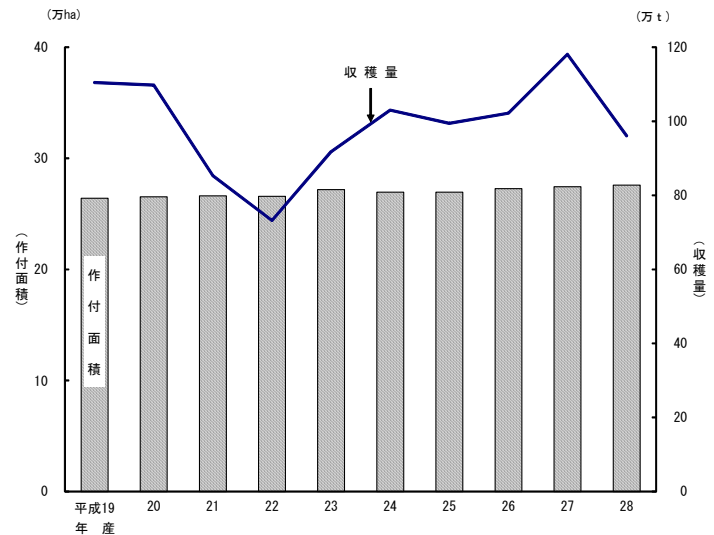


表2-1 平成28年産4麦（子実用）の作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区 分	作付面積	10 a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収	収 穫 量		10a 当 たり 平均 収 量 対 比	10a 当 たり 平均 収 量	
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比	%	kg	
全 国	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
4 麦 計	275,900	...	961,000	1,500	101	nc	△ 220,000	81	nc	...	
小 麦	214,400	369	790,800	1,300	101	78	△ 213,200	79	99	371	
二条大麦	38,200	280	106,800	300	101	94	△ 6,500	94	92	305	
六条大麦	18,200	295	53,600	0	100	103	1,300	102	105	281	
はだか麦	4,990	200	10,000	△ 210	96	92	△ 1,300	88	78	255	
北 海 道											
4 麦 計	124,600	...	531,100	400	100	nc	△ 206,500	72	nc	...	
小 麦	122,900	427	524,300	300	100	72	△ 206,700	72	100	428	
二条大麦	1,690	398	6,720	50	103	100	210	103	125	318	
はだか麦	19	349	66	7	158	95	22	150	105	332	
都 府 県											
4 麦 計	151,300	...	429,900	1,200	101	nc	△ 13,700	97	nc	...	
小 麦	91,500	291	266,500	1,000	101	96	△ 6,700	98	99	295	
二条大麦	36,500	274	100,100	200	101	93	△ 6,700	94	90	304	
六条大麦	18,200	295	53,600	0	100	103	1,300	102	105	281	
はだか麦	4,970	200	9,940	△ 210	96	92	△ 1,360	88	79	254	

- 注：1 「(参考) 10a 当たり平均収量対比」とは、10a 当たり平均収量（原則として直近7か年のうち、最高及び最低を除いた5か年の平均値）に対する当年産の10a 当たり収量の比率である（以下各統計表において同じ。）。
- 2 全国、都府県及び全国農業地域別（以下「地域別」という。）の10a 当たり平均収量は、各都府県の10a 当たり平均収量に当年産の作付面積を乗じて求めた平均収穫量を地域別に積み上げ、当年産の地域別作付面積で除して算出している。ただし、地域別内の全ての都道府県の10a 当たり平均収量がそろわない場合には作成しない（以下各統計表において同じ。）。
- 3 北海道において、六条大麦の作付けは行われていない。

表 2-2 平成28年産小麦（子実用）の作付面積、10a 当たり収量及び収穫量（全国農業地域別）

全農地	国	4 麦 計		小 麦				二 条 大 麦				六 条 大 麦				は だ か 麦			
		作 面 積	収 穫 量	作 面 積	10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 均 量 比	作 面 積	10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 均 量 比	作 面 積	10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 均 量 比	作 面 積	10 a 当 たり 収 穫 量	収 穫 量	(参 考) 10 a 当 たり 均 量 比
		ha	t	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%	ha	kg	t	%
全 国		275,900	961,000	214,400	369	790,800	99	38,200	280	106,800	92	18,200	295	53,600	105	4,990	200	10,000	78
北 海 道		124,600	531,100	122,900	427	524,300	100	1,690	398	6,720	125	-	-	-	nc	19	349	66	105
都 府 県		151,300	429,900	91,500	291	266,500	99	36,500	274	100,100	90	18,200	295	53,600	105	4,970	200	9,940	79
東 北		8,120	21,800	6,940	264	18,300	132	4	200	8	267	1,180	303	3,580	128	x	x	x	nc
北 陸		10,600	32,400	313	261	816	143	7	171	12	120	10,300	308	31,700	106	-	-	-	nc
関 東・東 山		38,400	134,500	21,000	359	75,400	106	12,400	359	44,500	107	5,080	287	14,600	104	55	284	156	100
東 海		16,700	51,500	16,000	313	50,000	107	6	100	6	75	665	226	1,500	92	2	150	3	75
近 畿		10,600	24,200	9,350	228	21,300	93	158	247	390	112	945	220	2,080	85	x	299	x	128
中 国		5,600	13,000	2,210	212	4,680	83	2,840	268	7,600	81	x	149	x	86	464	124	577	73
四 国		4,590	11,100	1,920	280	5,370	96	x	188	x	58	-	-	-	nc	2,640	216	5,690	78
九 州		56,600	141,300	33,800	268	90,700	88	21,200	224	47,500	80	x	200	x	59	1,670	184	3,080	77
沖 縄		27	32	27	119	32	65	-	-	-	nc	-	-	-	nc	-	-	-	nc

(2) 解 説

ア 小麦（子実用）

(ア) 作付面積

小麦の子実用作付面積は21万4,400haで、前年産に比べ1,300ha（1%）増加した。

このうち、北海道は12万2,900haで、前年産並みとなった。

一方、都府県は9万1,500haで、前年産に比べ1,000ha（1%）増加した。

これは、他作物等からの転換等があったためである（表2-1、2-2、図2-2）。

(イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は369kgで、前年産に比べ22%下回った（表2-1、2-2、図2-2）。

a 北海道

10a 当たり収量は427kgで、前年産に比べ28%下回った。

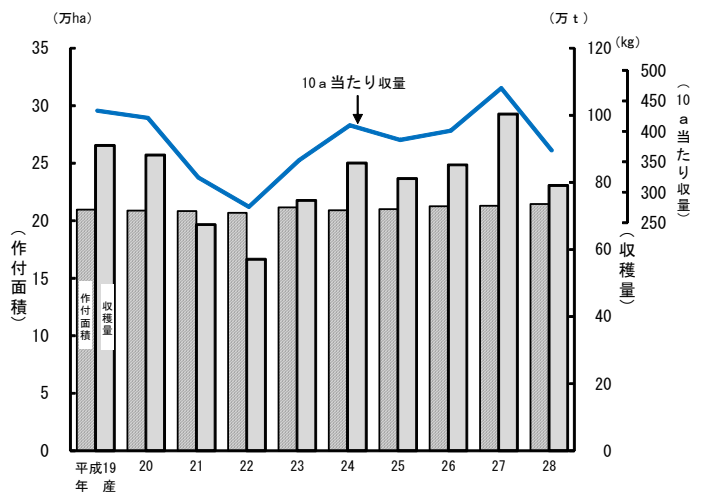
これは、出穂期以降の天候不順により登熟が抑制されたこと等から、作柄の良かった前年産に比べ下回ったためである（表2-1、2-2、図2-3）。

b 都府県

10a 当たり収量は291kgで、前年産に比べ4%下回った。

これは、近畿以西において出穂期以降気温が高めに推移し登熟期間が短くなったこと等から下回ったためである（表2-1、2-2、図2-4）。

図 2-2 小麦の作付面積、収穫量及び 10a 当たり収量の推移（全国）



(ウ) 収穫量

収穫量は79万800 tで、前年産に比べ21万3,200 t (21%) 減少した。

このうち、北海道の収穫量は52万4,300tで、前年産に比べ20万6,700 t (28%) 減少した。

一方、都府県の収穫量は26万6,500tで、前年産に比べ6,700t (2%) 減少した(表2-1、2-2、図2-2)。

図2-3 平成28年産麦作期間の半旬別
気象経過(帯広)

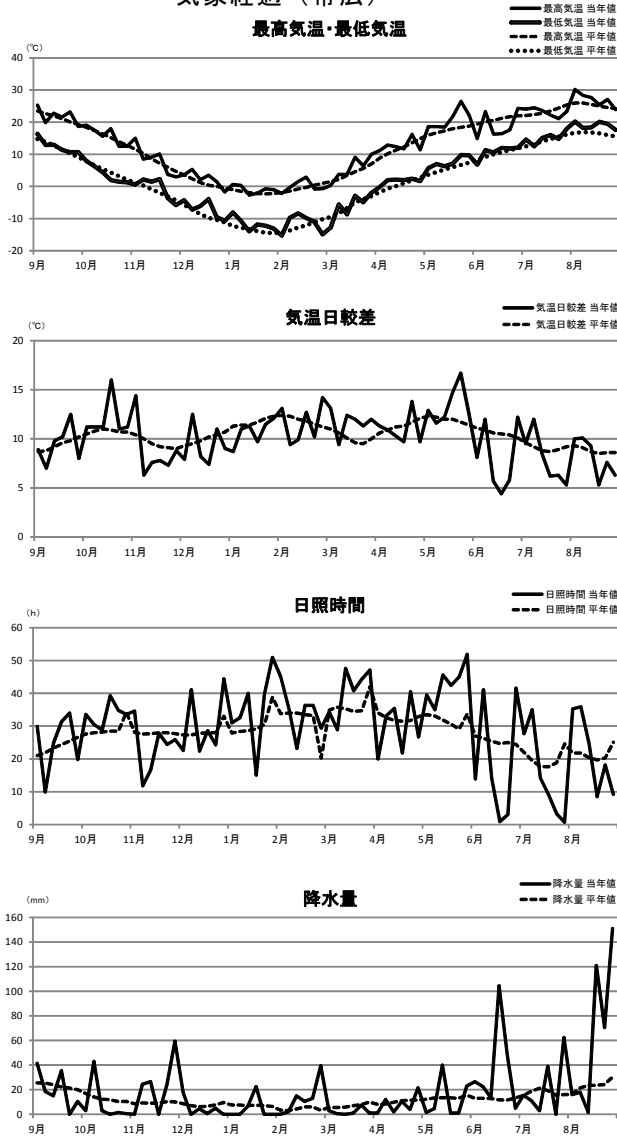
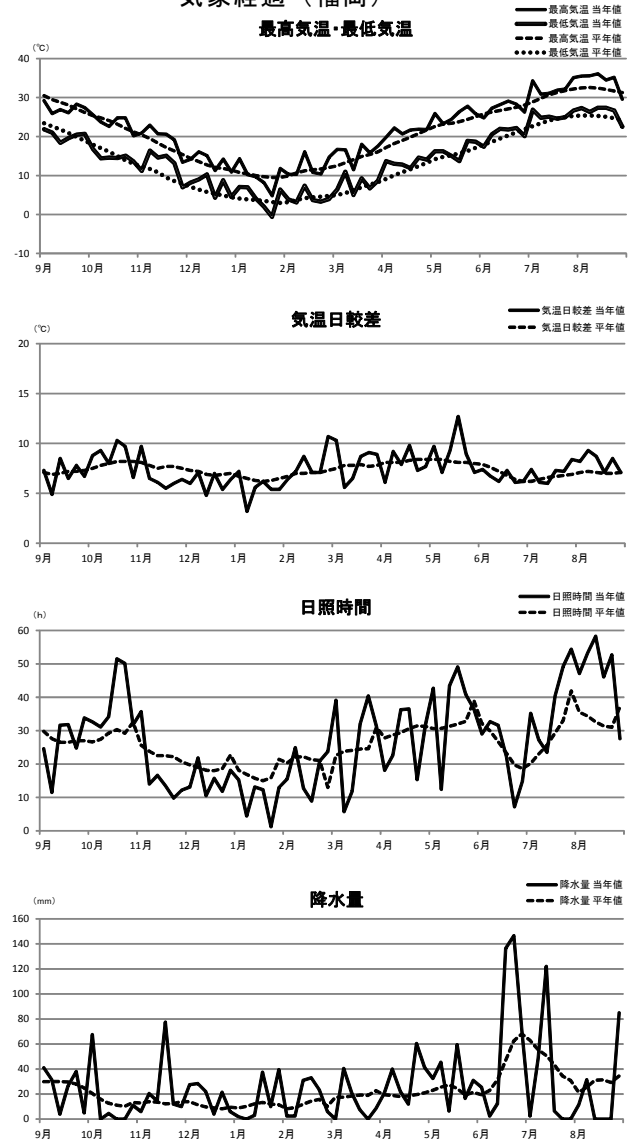


図2-4 平成28年産麦作期間の半旬別
気象経過(福岡)



イ 二条大麦（子実用）

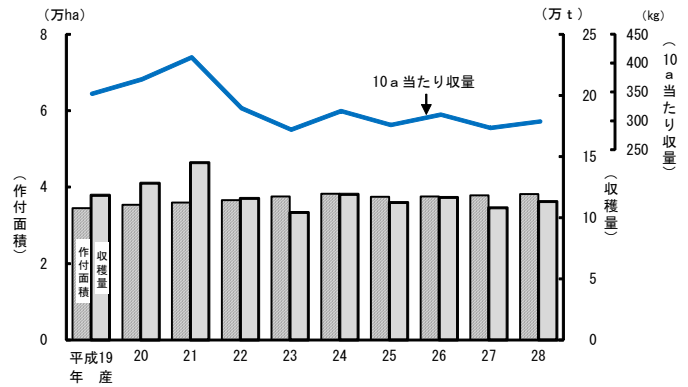
(ア) 作付面積

二条大麦の子実用作付面積は3万8,200haで、前年産に比べ300ha（1%）増加した。

このうち、北海道は1,690haで、前年産に比べ50ha（3%）増加した。

また、都府県は3万6,500haで、九州地域において作付けが増加したこと等により、前年産に比べ200ha（1%）増加した（表2-1、2-2、図2-5）。

図2-5 二条大麦の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



(イ) 10a 当たり収量

10a 当たり収量は280kgで、前年産に比べ6%下回った。

これは、は種期の降雨による発芽不良、出穂期以降気温が高めに推移し登熟期間が短くなったこと等から下回ったためである（表2-1、2-2、図2-5、2-6、2-7）。

(ウ) 収穫量

収穫量は10万6,800tで、前年産に比べ6,500t（6%）減少した（表2-1、2-2、図2-5）。

図2-6 平成28年産麦作期間の半月別気象経過（栃木）

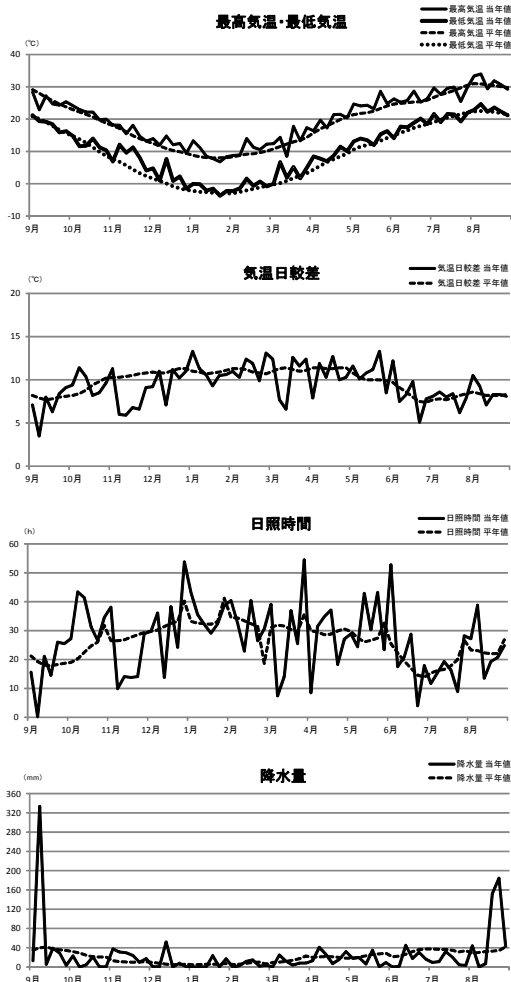
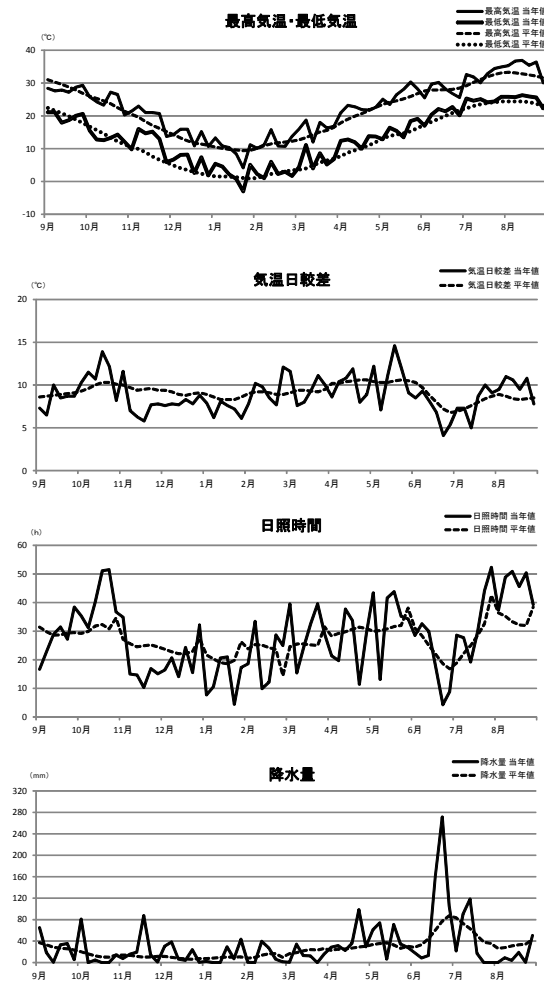


図2-7 平成28年産麦作期間の半月別気象経過（福岡）



ウ 六条大麦（子実用）

(ア) 作付面積

六条大麦の子実用作付面積は1万8,200 haで、前年産並みとなった（表2-1、2-2、図2-8）。

(イ) 10 a 当たり収量

10 a 当たり収量は295kgで、前年産に比べ3%上回った。これは、北陸地域において天候がおおむね良好であったこと等から上回ったためである（表2-1、2-2、図2-8、2-9、2-10）。

(ウ) 収穫量

収穫量は5万3,600 tで、前年産に比べ1,300 t（2%）増加した（表2-1、2-2、図2-8）。

図2-8 六条大麦の作付面積、収穫量及び10 a 当たり収量の推移（全国）

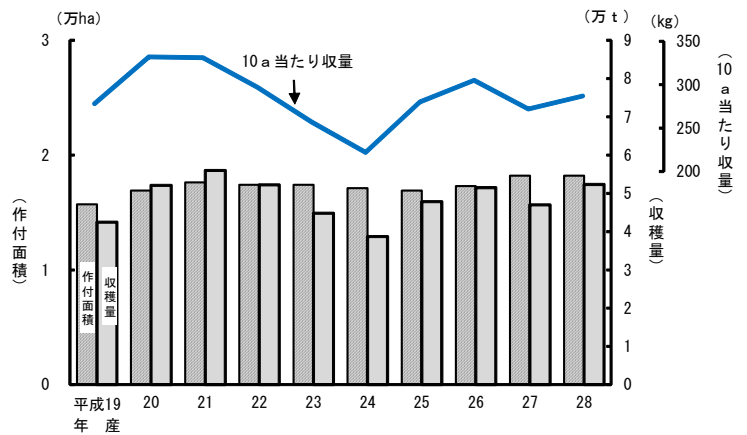


図2-9 平成28年産麦作期間の半月別気象経過（富山）

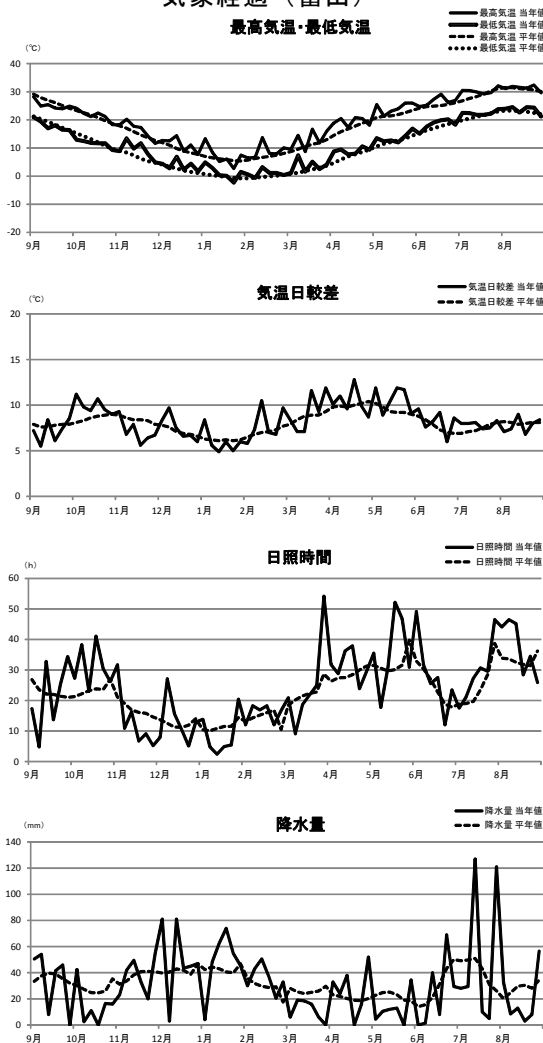
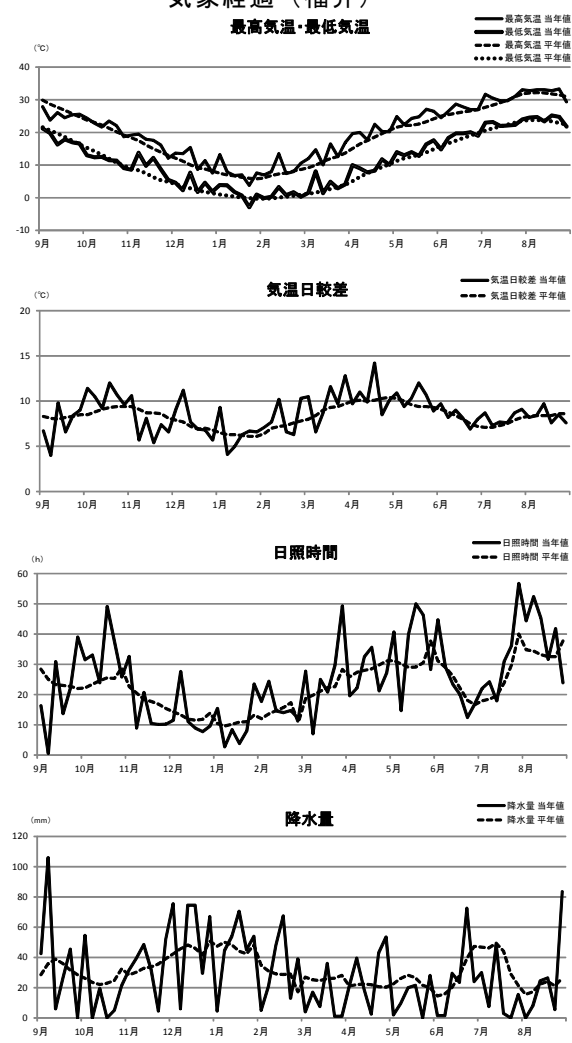


図2-10 平成28年産麦作期間の半月別気象経過（福井）



エ はだか麦（子実用）

(ア) 作付面積

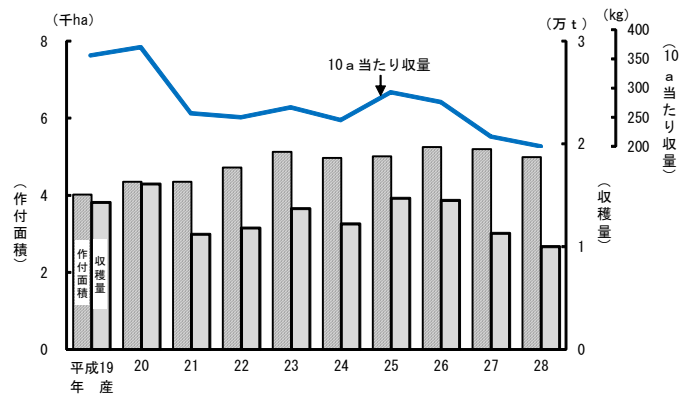
はだか麦の子実用作付面積は4,990haで、前年産に比べ210ha（4%）減少した。これは、小麦等への転換等があったためである（表2-1、2-2、図2-11）。

(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は200kgで、前年産に比べ8%下回った。

これは、愛媛県や大分県において、は種期の降雨による発芽不良、2月下旬から4月中旬にかけて降雨等の影響により分けつが抑制されたことに加え、登熟も不良であったためである（表2-1、2-2、図2-11、2-12、2-13）。

図2-11 はだか麦の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



(ウ) 収穫量

収穫量は1万tで、前年産に比べ1,300t（12%）減少した（表2-1、2-2、図2-11）。

図2-12 平成28年産麦作期間の半旬別気象経過（愛媛）

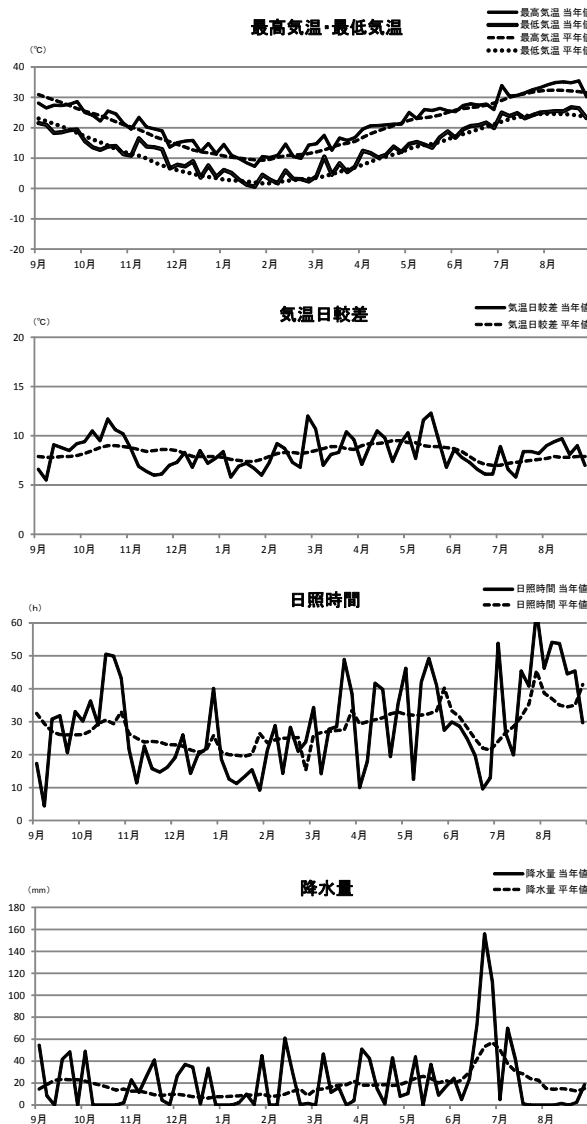
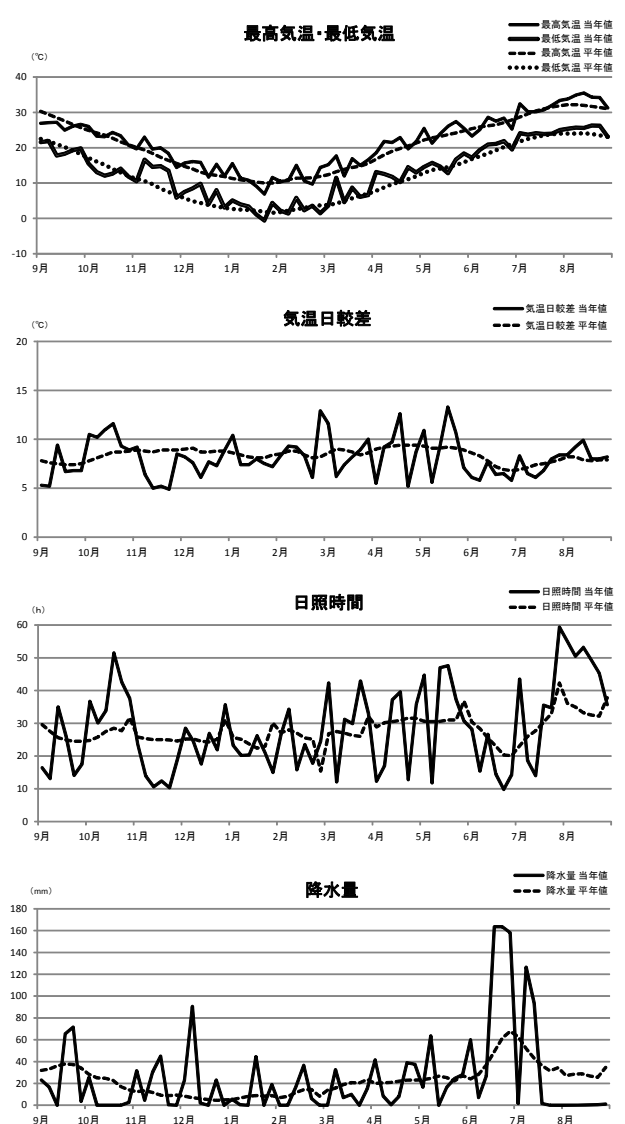


図2-13 平成28年産麦作期間の半旬別気象経過（大分）



3 豆類・そば

(1) 要旨

平成28年産の豆類(乾燥子実)の収穫量は、大豆が23万8,000 t、小豆が2万9,500 t、いんげんは5,650 tで、それぞれ前年産に比べ5,100 t (2%)、3万4,200 t (54%)、1万9,900 t (78%) 減少した。一方、らっかせいは1万5,500 tで、前年産に比べ3,200 t (26%) 増加した。

また、そばの収穫量は2万8,800 tで、前年産に比べ6,000 t (17%) 減少した(表3)。

表3 平成28年産豆類(乾燥子実)及びそばの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10 a 当たり収量	収穫量	前年産との比較						(参考)	
				作付面積		10 a 当たり収	収穫量		10 a 当たり平均収量対	10 a 当たり平均収量	
				対差	対比	対比	対差	対比	%	kg	
	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
大豆	150,000	159	238,000	8,000	106	93	△ 5,100	98	92	173	
小豆	21,300	138	29,500	△ 6,000	78	59	△ 34,200	46	nc	…	
うち北海道	16,200	167	27,100	△ 5,700	74	61	△ 32,400	46	69	242	
いんげん	8,560	66	5,650	△ 1,640	84	26	△ 19,900	22	nc	…	
うち北海道	7,940	69	5,480	△ 1,610	83	27	△ 19,300	22	37	187	
らっかせい	6,550	237	15,500	△ 150	98	129	3,200	126	nc	…	
うち千葉	5,170	238	12,300	△ 70	99	130	2,710	128	98	242	
そば	60,600	48	28,800	2,400	104	80	△ 6,000	83	84	57	

注：小豆、いんげん及びらっかせいの収穫量調査は主産県調査であり、3年周期で全国調査を実施している。平成28年産については主産県を対象に調査を行った。なお、全国値は、主産県調査結果と主産県以外の推計値を合算したものである。

(2) 解説

ア 大豆(乾燥子実)

(ア) 作付面積

大豆の作付面積は15万haで、前年産に比べ8,000ha (6%) 増加した。

これは、水稻、小豆等からの転換があったためである(表3、図3-1)。

(イ) 10a当たり収量

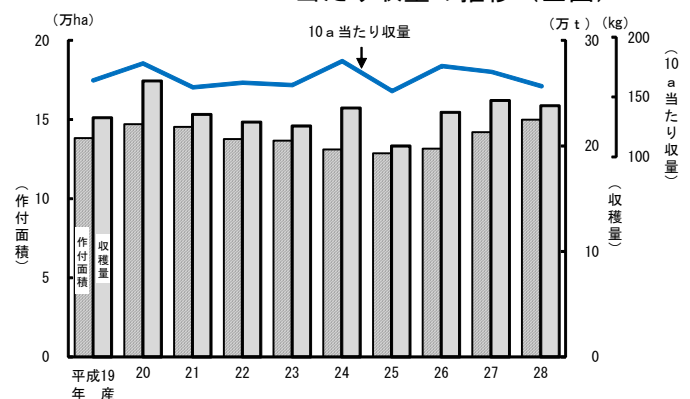
10a当たり収量は159kgで、前年産に比べ7%下回った。

これは、北海道等において天候不順の影響により生育が抑制されたこと等による(表3、図3-1)。

(ウ) 収穫量

収穫量は23万8,000 tで、前年産に比べ5,100 t (2%) 減少した(表3、図3-1)。

図3-1 大豆の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移(全国)



イ 小豆（乾燥子実）

(ア) 作付面積

小豆の作付面積は2万1,300haで、前年産に比べ6,000ha（22%）減少した。

このうち、全国の約8割を占める北海道の作付面積は1万6,200haで、前年産に比べ5,700ha（26%）減少した。

これは、大豆等への転換等があったためである（表3、図3-2）。

(イ) 10a当たり収量

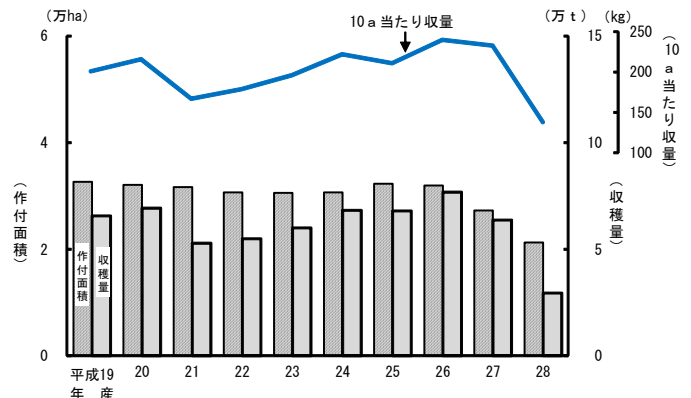
10a当たり収量は138kgで、前年産に比べ41%下回った。

これは、主産地である北海道において、天候不順による影響と台風等による被害により生育が抑制されたことに加え、被害粒が多く発生したためである（表3、図3-2）。

(ウ) 収穫量

収穫量は2万9,500tで、前年産に比べ3万4,200t（54%）減少した（表3、図3-2）。

図3-2 小豆の作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



ウ いんげん（乾燥子実）

(ア) 作付面積

いんげんの作付面積は8,560haで、前年産に比べ1,640ha（16%）減少した。

このうち、全国の約9割を占める北海道の作付面積は7,940haで、前年産に比べ1,610ha（17%）減少した。

これは、大豆等への転換等があったためである。（表3、図3-3）。

(イ) 10a当たり収量

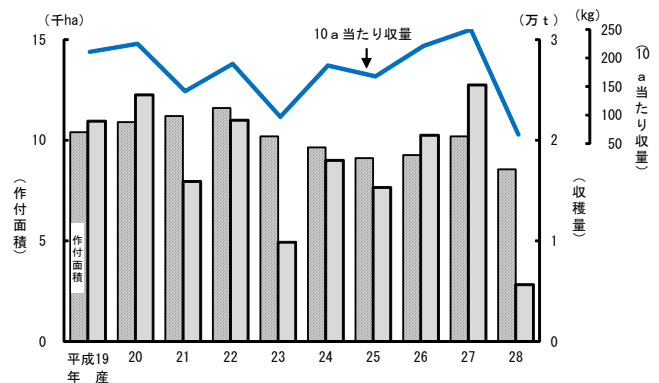
10a当たり収量は66kgで、前年産に比べ74%下回った。

これは、主産地である北海道において、天候不順による影響と台風等による被害により生育が抑制されたことに加え、着色不良等の被害粒が多く発生したためである（表3、図3-3）。

(ウ) 収穫量

収穫量は5,650tで、前年産に比べ1万9,900t（78%）減少した（表3、図3-3）。

図3-3 いんげんの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



エ らっかせい（乾燥子実）

(ア) 作付面積

らっかせいの作付面積は6,550haで、前年産に比べ150ha（2%）減少した。このうち、全国の約8割を占める千葉県で作付面積は5,170haで、前年産に比べ70ha（1%）減少した（表3、図3-4）。

(イ) 10a当たり収量

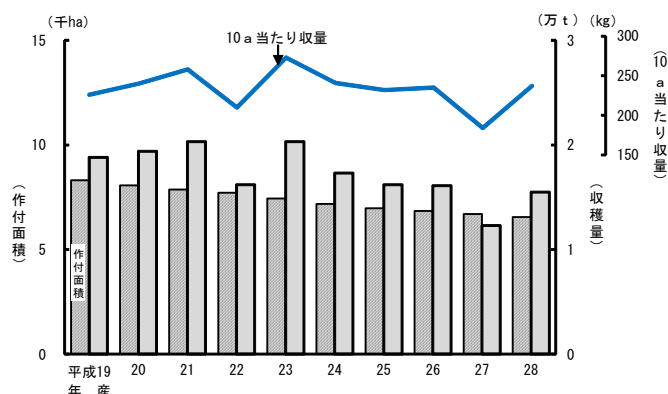
10a当たり収量は237kgで、前年産に比べ29%上回った。

これは、主産地である千葉県において、おおむね天候に恵まれたことから、作柄の悪かった前年産を上回ったためである（表3、図3-4）。

(ウ) 収穫量

収穫量は1万5,500tで、前年に比べ3,200t（26%）増加した（表3、図3-4）。

図3-4 らっかせいの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



オ そば

(ア) 作付面積

そばの作付面積は6万600haで、前年産に比べ2,400ha（4%）増加した。

これは、他作物からの転換等があったためである（表3、図3-5）。

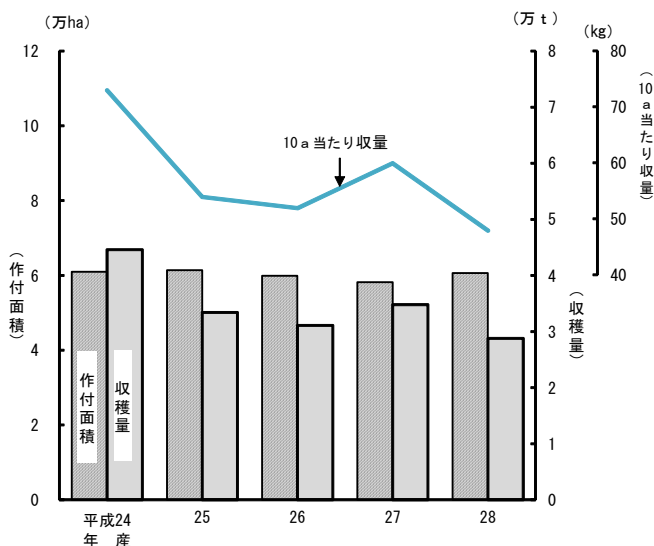
(イ) 10a当たり収量

10a当たり収量は48kgで、前年産に比べ20%下回った。

これは、そばの生育期間において、多雨による発芽不良等のほか、台風による倒伏被害により生育が抑制されたためである。

なお、10a当たり平均収量対比は84%となった（表3、図3-5）。

図3-5 そばの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



(ウ) 収穫量

収穫量は2万8,800tで、前年産に比べ6,000t（17%）減少した（表3、図3-5）。

4 かんしょ

(1) 作付面積

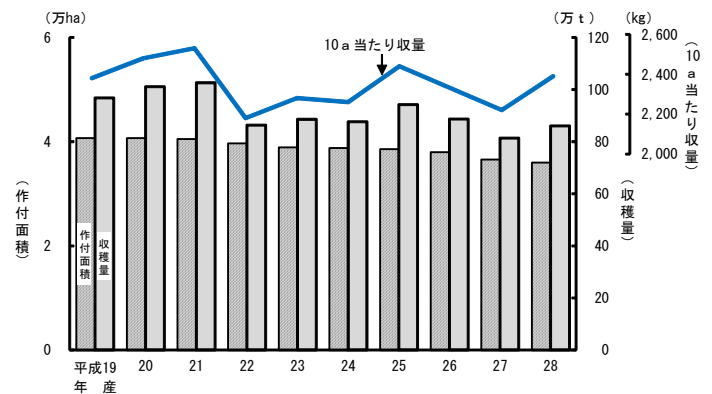
かんしょの作付面積は3万6,000haで、前年産に比べ600ha（2%）減少した（表4、図4）。

(2) 10a当たり収量

10a当たり収量は2,390kgで、前年産に比べ8%上回った。

これは、九州地域においておおむね天候に恵まれ、生育が良好となったためである（表4、図4）。

図4 かんしょの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）



(3) 収穫量

収穫量は86万700tで、前年産に比べ4万6,500t（6%）増加した（表4、図4）。

表4 平成28年産かんしょの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	前年産との比較						(参考)	
				作付面積		10a 当たり 収量	収穫量		10a 当たり 平均収量 対比	10a 当たり 平均収量	
				対差	対比	対比	対差	対比	%	kg	
全 国	36,000	2,390	860,700	△ 600	98	108	46,500	106	103	2,330	
うち 茨城	6,720	2,560	172,000	20	100	104	6,500	104	98	2,600	
千葉	4,190	2,470	103,500	△ 50	99	100	△ 1,700	98	98	2,510	
静岡	625	1,760	11,000	△ 36	95	109	300	103	108	1,630	
徳島	1,120	2,550	28,600	△ 10	99	110	2,400	109	108	2,370	
熊本	1,020	2,230	22,700	△ 50	95	100	△ 1,100	95	99	2,250	
宮崎	3,590	2,570	92,300	150	104	104	7,300	109	100	2,560	
鹿児島	12,000	2,690	322,800	△ 400	97	113	27,700	109	107	2,510	

注：かんしょの収穫量調査は主産県調査であり、3年周期で全国調査を実施している。平成28年産については主産県を対象に調査を行った。なお、全国値は、主産県調査結果と主産県以外の推計値を合算したものである。

5 飼料作物

(1) 牧草

ア 作付（栽培）面積

牧草の作付（栽培）面積は73万5,200haで、前年産並みとなった（表5-1、図5-1）。

イ 10a 当たり収量

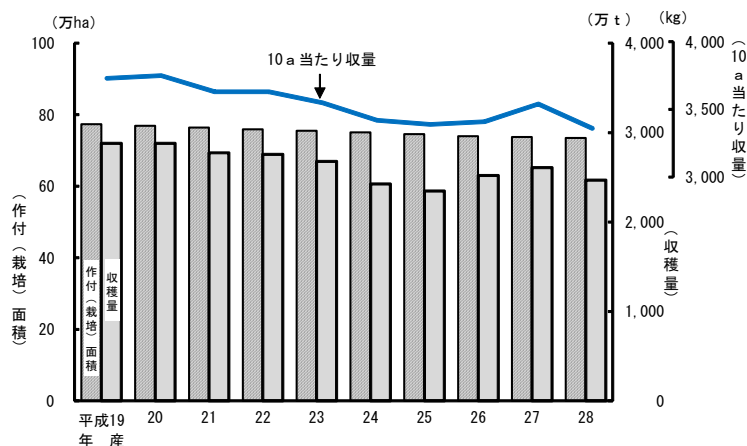
10a 当たり収量は3,360kgで、前年産に比べ5%下回った。

これは、北海道において、6月から9月までの天候不順により生育が抑制されたためである（表5-1、図5-1）。

ウ 収穫量

収穫量は2,468万9,000tで、前年産に比べ140万3,000t（5%）減少した（表5-1、図5-1）。

図5-1 牧草の作付（栽培）面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）



注：平成24年産及び平成25年産の10a 当たり収量及び収穫量については、全国値の推計を行っていないため、主産県の合計値である。

表5-1 平成28年産牧草の作付（栽培）面積、10a 当たり収量及び収穫量

区分	作付（栽培）面積	10a 当たり収量	収穫量	前年産との比較						（参考）	
				作付（栽培）面積		10a 当たり収量	収穫量		10a 当たり平均収量対比	10a 当たり平均収量	
				対差	対比	対比	対差	対比			
全 国	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg	
	735,200	3,360	24,689,000	△ 2,400	100	95	△ 1,403,000	95	nc	…	
うち北海道	538,500	3,120	16,801,000	△ 2,000	100	93	△ 1,252,000	93	95	3,290	

注：飼料作物の収穫量調査は主産県調査であり、3年周期で全国調査を実施している。平成28年産については主産県を対象に調査を行った。なお、全国値は、主産県調査結果と主産県以外の推計値を合算したものである。

(2) 青刈りとうもろこし

ア 作付面積

青刈りとうもろこしの作付面積は9万3,400haで、前年産に比べ1,000ha（1%）増加した（表5-2、図5-2）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は4,560kgで、前年産に比べ13%下回った。

これは、北海道において、6月から9月までの天候不順により生育が抑制されたことに加え、台風による倒伏や折損の被害等があったためである（表5-2、図5-2）。

ウ 収穫量

収穫量は425万5,000tで、前年産に比べ56万8,000t（12%）減少した（表5-2、図5-2）。

図5-2 青刈りとうもろこしの作付面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（全国）

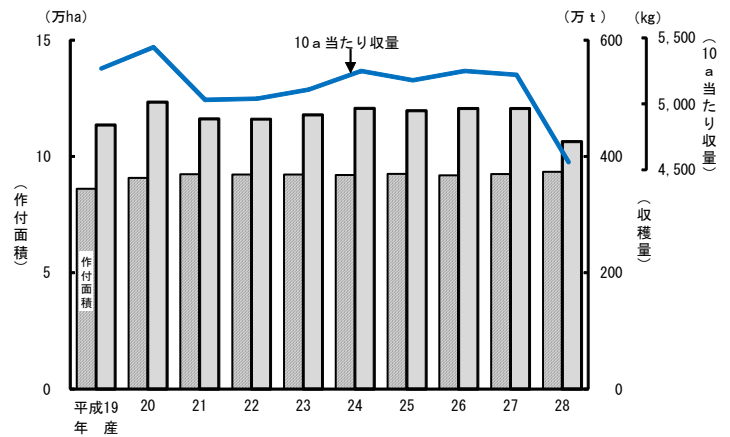


表5-2 平成28年産青刈りとうもろこしの作付面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較						(参 考)	
				作 付 面 積		10 a 当 たり 収 量	収 穫 量		10 a 当 たり 平 均 収 量 対 比	10 a 当 たり 平 均 収 量	
				対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			
全 国	93,400 ha	4,560 kg	4,255,000 t	1,000 ha	101 %	87 %	△ 568,000 t	88 %	nc	… kg	
う ち 北 海 道	53,000	4,720	2,502,000	1,700	103	84	△ 376,000	87	87	5,450	

(3) ソルゴー

ア 作付面積

ソルゴーの作付面積は1万4,800haで、前年産に比べ400ha（3%）減少した。

イ 10a 当たり収量

10a 当たり収量は4,430kgで、前年産に比べ8%下回った。

これは、九州地域において、天候不順により生育が抑制されたためである（表5-3、図5-3）。

ウ 収穫量

収穫量は65万5,300tで、前年産に比べ7万3,300t（10%）減少した（表5-3、図5-3）。

図5-3 ソルゴーの作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移（全国）

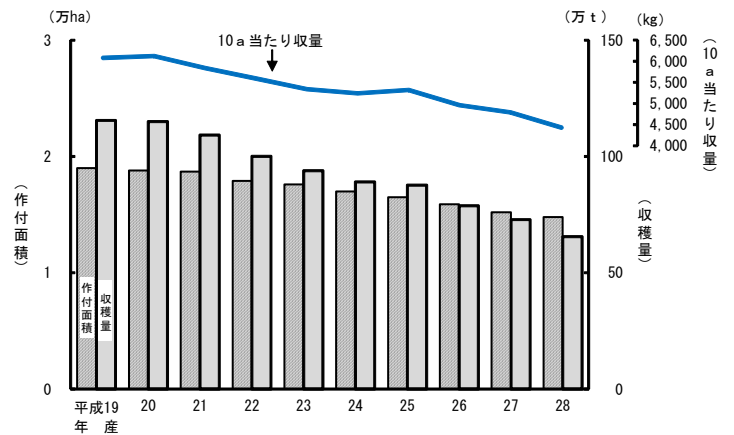


表5-3 平成28年産ソルゴーの作付面積、10a 当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10 a 当たり収量	収穫量	前年産との比較						(参考)		
				作付面積		10 a 当たり収量		収穫量		10 a 当たり平均収量対比	10 a 当たり平均収量	
				対差	対比	対比	対比	対差	対比			
全 国	ha 14,800	kg 4,430	t 655,300	△	400	97	92	△	73,300	90	nc	...

6 工芸農作物

(1) 茶

ア 栽培面積

茶の栽培面積は4万3,100haで、前年に比べ900ha（2%）減少した（表6-1）。

イ 摘採実面積

主産県の摘採実面積は3万4,900haで、前年産に比べ700ha（2%）減少した（表6-2）。

ウ 生葉収穫量

主産県の生葉収穫量は36万4,500tで、前年産に比べ6,700t（2%）増加した。（表6-2）。

エ 荒茶生産量

主産県の荒茶生産量は7万7,100tで、前年産に比べ700t（1%）増加した。都府県別にみると、静岡県が3万700t（全国に占める割合は38%）、次いで鹿児島県が2万4,600t（同31%）、三重県が6,370t（同8%）となっている（表6-2、図6-1）。

表6-1 茶の栽培面積（全国）

単位：ha	
区分	栽培面積
平成27年	44,000
28	43,100
対前年産比（%）	98

図6-1 荒茶生産量割合（主産県）

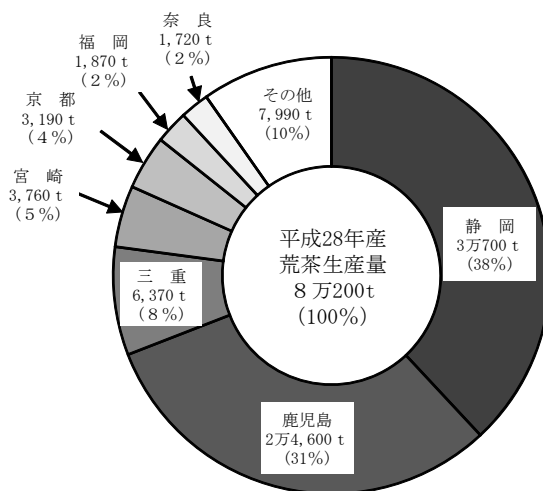


表6-2 平成28年の摘採面積、10a当たり生葉収量、生葉収穫量及び荒茶生産量（主産県）

区分	摘採面積		10a当たり生葉収量			生葉収穫量			荒茶生産量		
	実面積	延べ面積	一番茶	二番茶		一番茶	二番茶		一番茶	二番茶	
	ha	ha	kg	kg	kg	t	t	t	t	t	t
平成27年産	35,600	81,300	1,010	431	455	357,800	153,600	101,400	76,400	31,400	20,300
28	34,900	82,000	1,040	431	459	364,500	150,300	101,000	77,100	30,100	20,000
対前年産比（%）	98	101	103	100	101	102	98	100	101	96	99

注：茶の収穫量調査は主産県調査であり、5年周期で全国調査を実施している。平成28年産については主産県を対象に調査を行った。

(2) なたね

ア 作付面積

なたねの作付面積は1,980haで、前年産に比べ350ha (21%) 増加した (表6-3、図6-2)。

イ 10a 当たり収量

10a 当たり収量は184kgで、前年産に比べ5%下回った。

これは、生育期間全般においておおむね天候に恵まれたものの、作柄の良かった前年産に比べ下回ったためである (表6-3、図6-2)。

ウ 収穫量

収穫量は3,650tで、前年産に比べ490t (16%) 増加した (表6-3、図6-2)。

図6-2 なたねの作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移 (全国)

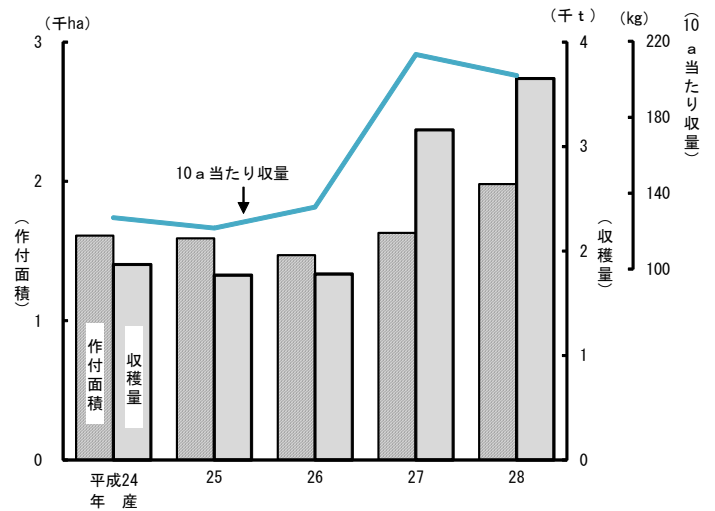


表6-3 平成28年産なたねの作付面積、10a 当たり収量及び収穫量

区分	作付面積	10a 当たり収量	収穫量	前年産との比較						(参考)	
				作付面積		10a 当たり収	収穫量		10a 当たり平均収量対比	10a 当たり平均収量	
				対差	対比	対比	対差	対比			
ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg		
全国	1,980	184	3,650	350	121	95	490	116	133	138	
北海道	884	282	2,490	279	146	89	570	130	142	199	
都府県	1,090	106	1,160	70	107	87	△ 80	94	119	89	

(3) てんさい（北海道）

ア 作付面積

北海道のてんさいの作付面積は5万9,700haで、前年産に比べ900ha（2%）増加した（表6-4、図6-3）。

イ 10aあたり収量

北海道の10aあたり収量は5,340kgで、前年産に比べ20%下回った。

これは、生育期間における低温、寡照及び多雨の影響により、湿害等の被害が多発したこと等による（表6-4、図6-3）。

ウ 収穫量

北海道の収穫量は318万9,000tで、前年産に比べ73万6,000t（19%）減少した（表6-4、図6-3）。

図6-3 てんさいの作付面積、収穫量及び10aあたり収量の推移（北海道）

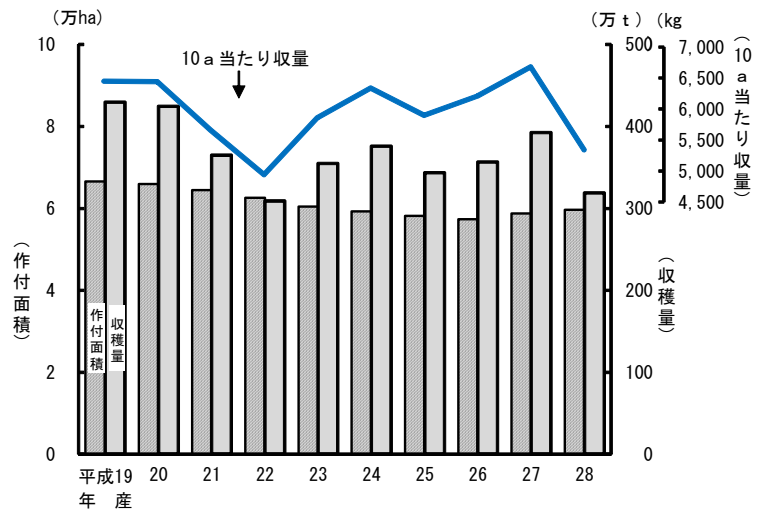


表6-4 平成28年産てんさいの作付面積、10aあたり収量及び収穫量

区分	作付面積	10aあたり収量	収穫量	前年産との比較				(参考)		
				作付面積		10aあたり収量		10aあたり平均収量対		
				対差	対比	対比	対差	対比	対比	
北海道	ha	kg	t	ha	%	%	t	%	%	kg
	59,700	5,340	3,189,000	900	102	80	△ 736,000	81	89	5,990

注：てんさいの作付面積及び収穫量調査は、北海道を対象に行っている。

(4) さとうきび

ア 収穫面積

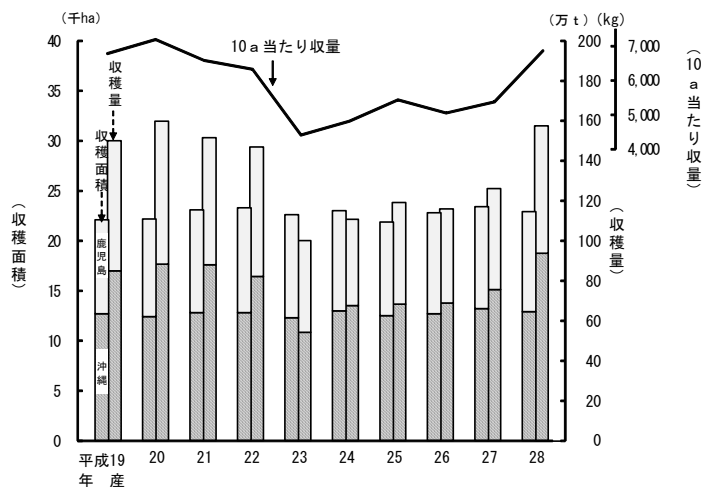
さとうきびの収穫面積は2万2,900haで、前年産に比べ500ha（2%）減少した（表6-5、図6-4）。

イ 10a当たり収量

10a当たり収量は6,870kgで、前年産に比べ28%上回った。

これは、生育期間の天候がおおむね順調に経過し、台風等の被害が軽微であったためである（表6-5、図6-4）。

図6-4 さとうきびの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移



ウ 収穫量

収穫量は157万4,000tで、前年産に比べ31万4,000t（25%）増加した（表6-5、図6-4）。

表6-5 平成28年産さとうきびの作型別栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	栽培面積 ha	収穫面積				10a当たり収量			
		計 ha	夏植え ha	春植え ha	株出し ha	計 kg	夏植え kg	春植え kg	株出し kg
全国 平成27年産	29,600	23,400	5,990	3,410	14,000	5,380	7,090	4,850	4,780
28	28,800	22,900	5,400	3,040	14,500	6,870	8,670	6,490	6,270
対前年産比(%)	97	98	90	89	104	128	122	134	131
鹿児島	11,400	10,000	1,290	1,790	6,950	6,370	8,020	6,520	5,990
対前年産比(%)	96	98	102	88	101	129	121	131	129
沖縄	17,400	12,900	4,110	1,250	7,590	7,270	8,870	6,440	6,490
対前年産比(%)	98	98	87	91	107	127	123	137	132

区分	収穫量			
	計 t	夏植え t	春植え t	株出し t
全国 平成27年産	1,260,000	424,900	165,400	669,700
28	1,574,000	468,000	197,200	909,100
対前年産比(%)	125	110	119	136
鹿児島	636,500	103,500	116,700	416,300
対前年産比(%)	126	123	115	130
沖縄	937,800	364,500	80,500	492,800
対前年産比(%)	124	107	125	141

注：さとうきびの作付面積及び収穫量調査は、鹿児島県及び沖縄県を対象に行っている。

(5) こんにゃくいも（主産県）

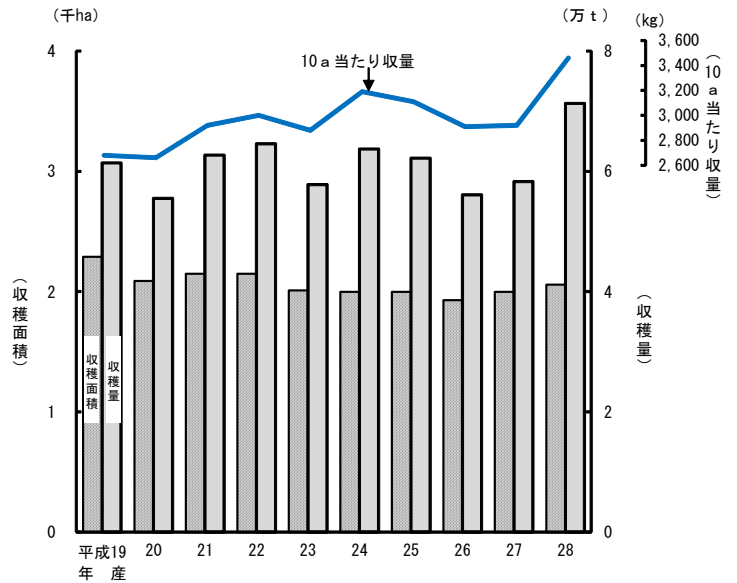
ア 栽培面積・収穫面積

主産県のこんにゃくいもの栽培面積は3,470haで前年産に比べ20ha（1%）減少した。また、主産県の収穫面積は2,060haで前年産に比べ60ha（3%）増加した。

このうち主産地である群馬県の栽培面積は3,370haで、前年産に比べ20ha（1%）減少し、収穫面積は1,990haで前年産に比べ60ha（3%）増加した。

これは、生育が良好であったため、種いもとする予定のものの一部をこんにゃくいもとして収穫したためである（表6-6、図6-5）。

図6-5 こんにゃくいもの収穫面積、収穫量及び10a当たり収量の推移（主産県）



イ 10a当たり収量

主産県の10a当たり収量は過去最高の3,460kgで、前年産に比べ18%上回った。

このうち主産地である群馬県のこんにゃくいもの10a当たり収量は3,490kgで、前年産に比べ19%上回った。

これは、種いもの状態が良かったことに加え、天候に恵まれ、生育が良好となったためである（表6-6、図6-5）。

ウ 収穫量

主産県の収穫量は7万1,300tで、前年産に比べ1万3,000t（22%）増加した。

このうち主産地である群馬県のこんにゃくいもの収穫量は6万9,500tで、前年産に比べ1万3,000t（23%）増加した（表6-6、図6-5）。

表6-6 平成28年産こんにゃくいもの栽培・収穫面積、10a当たり収量及び収穫量

区分	栽培面積	収穫面積	10a 当たり 収 量	収 穫 量	前 年 産 と の 比 較								(参 考)	
					栽 培 面 積		収 穫 面 積		10a 当 たり 収 量		収 穫 量		10a 当 たり 平 均 収 量 対 比	10a 当 たり 平 均 収 量
					対 差	対 比	対 差	対 比	対 比	対 差	対 比	%	kg	
主 産 県 計	ha	ha	kg	t	ha	%	ha	%	%	t	%	%	kg	
	3,470	2,060	3,460	71,300	△ 20	99	60 103	118	13,000	122	116	2,980		
栃 木	99	69	2,610	1,800	△ 6	94	1 101	99	10	101	102	2,560		
群 馬	3,370	1,990	3,490	69,500	△ 20	99	60 103	119	13,000	123	117	2,990		

注：こんにゃくいもの作付面積及び収穫量調査は主産県調査であり、3年周期で全国調査を実施している。平成28年産については主産県を対象に調査を行った。

(6) い (主産県)

ア 作付面積

主産県 (福岡県及び熊本県) の「い」の作付面積は643haで、前年産に比べ58ha (8%) 減少した。

これは、他作物への転換等により減少したためである (表6-7、図6-6)。

イ 10a 当たり収量

主産県の10a 当たり収量は1,300kgで、前年産に比べ17%上回った。

これは、生育期間の天候がおおむね順調に経過したこと等から作柄の悪かった前年産を上回ったためである (表6-7、図6-6)。

ウ 収穫量

主産県の収穫量は8,340tで、前年産に比べ540t (7%) 増加した (表6-7、図6-6)。

エ 畳表生産農家数及び畳表生産量

主産県の「い」の生産農家数は522戸で、前年産に比べ28戸 (5%) 減少した。

このうち、畳表の生産まで一貫して行っている畳表生産農家数は476戸で、前年に比べ37戸 (7%) 減少した。

なお、平成27年7月から平成28年6月までの畳表生産量は2,540千枚で、前年に比べ240千枚 (9%) 減少した (表6-7)。

図6-6 「い」の作付面積、収穫量及び10a 当たり収量の推移 (主産県)

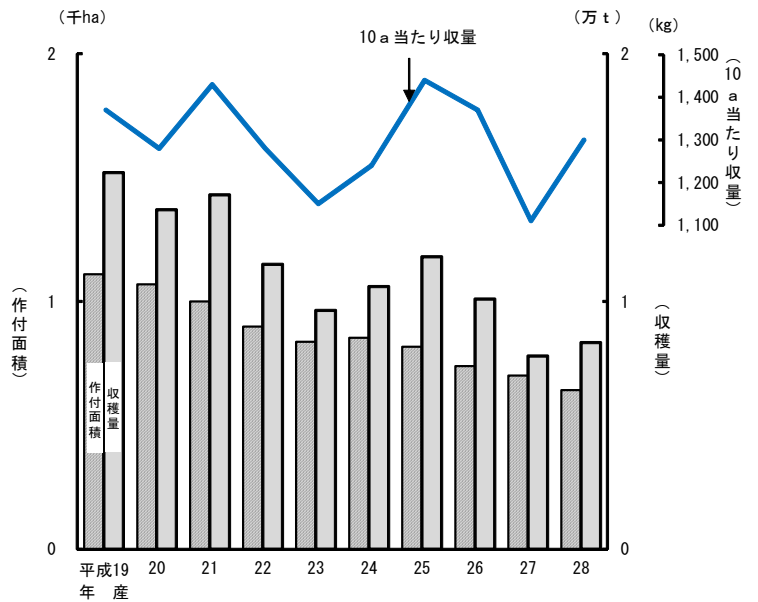


表6-7 平成28年産「い」の作付面積、10a 当たり収量、収穫量等 (主産県)

区分	「い」 生産 農家数	作付面積 ha	10 a 当 た り 収 量 kg	収 穫 量 t	前年産との比較						(参考)		畳表生産 農家数 戸	畳表 生産量 千枚
					作付面積		10 a 当 た り 収 量	収 穫 量		10a 当たり 平均収量 対	10a 当たり 平均収量			
					対 差	対 比	対 比	対 差	対 比			%		
主産県計	522	643	1,300	8,340	△ 58	92	117	540	107	101	1,290	476	2,540	
福 岡	13	12	1,180	142	△ 2	86	100	△ 23	86	94	1,260	10	40	
熊 本	509	631	1,300	8,200	△ 56	92	117	570	107	101	1,290	466	2,500	

注：1 「い」の収穫量調査は、福岡県及び熊本県を対象に行っている。
 2 「い」生産農家数は、平成28年産の「い」の栽培を行った農家の数である。
 3 畳表生産農家数は、平成27年7月から平成28年6月までに畳表の生産を行った農家の数である。
 4 畳表生産量は、平成27年7月から平成28年6月までに生産されたものである。